

ボリビア多民族国サンフアン移住地における カトリック教会の創成と発展

－南米の日本人移住地における「キリシタン移住者」の信仰生活－

小川 俊 輔

【要旨】南米のボリビア多民族国に「サンフアン」という名の日本人移住地がある。1955年に創設されたこの移住地では、熱心なカトリック信仰が行われてきた。移住地創設以来、その中心を担ってきたのは、長崎出身の、ザビエル時代にカトリックに改宗した人々の子孫であった。彼らの招来に応えるかたちで、1960年には日本語を話す神父が、1961年には指導的役割を果たし得る一般信徒が移住地に到着する。こうして、市街地に煉瓦造りの教会堂が建設され、他方では、カトリックへの集団改宗が起きた。その後、移住地のカトリック教会は、国内巡礼・世界巡礼、日本人神父による司牧、カトリック高位聖職者の来訪などを経験し、移住地出身の神父・修道女を多数輩出するなど、大いに発展し、今日を迎えている。

【キーワード】長崎、南米移住、潜伏キリシタン、カトリック、信仰生活

1. はじめに

1.1 本稿の目的－先行研究の成果と本稿の位置－

南米のボリビア多民族国に「サンフアン」という名の日本人移住地がある。1955年の16家族88名の入植を皮切りに、1992年まで、53次にわたり、302家族1684名がこの地に入植している。2010年10月現在の出身県別の移住者の割合は長崎46.4%、福岡7.4%、北海道5.1%、高知5.0%、熊本4.8%、その他31.3%である（サンフアン日本ボリビア協会 2011）。一見して、長崎県出身者の多さが注目される。そして、その長崎県出身者の中に、ザビエルの時代に洗礼を受け、禁教期には潜伏し、明治になってカトリック教会に復帰した者の子孫が多く含まれていた（Ide 1968; 小川 2013）。

本稿は、サンフアン移住地におけるカトリック教会の歴史について記述することを目的とする。この移住地にかんするまとまった著述として、『ボリビアの「日本人村」－サンタクルス州サンフアン移住地の研究－』に代表される国本伊代による一連の研究、当地で日本海外協会連合会ボリビア支部長として活躍した若槻泰雄の『発展途上国への移民の研究－ボリビアにおける日本移民－』⁽¹⁾、移住者自身の手によってまとめられた4冊の年史などがある。これらは、移住地の地理、経済、風土、教育、言語など多岐にわたる事象について幅広く記述している。しかし、本稿が考察の対象とするカトリック教会にかんするまとまった言及はない。

一方、本稿に直接関わる先行研究として、Ide (1968) と小川 (2013) とがある。

Ide (1968) は、移住地に住む日本人カトリック信者について、「日本においてカトリック信者であったグループ」と「サンフアンでカトリックに改宗したグループ」に分け、後者に比べて前者の方が熱心かつ明白な信仰を持つことを指摘し、その理由として、前者のほとんどが長崎県の出身であり、殉教者の子孫であることを挙げている。

小川 (2013) は、長崎出身でザビエル時代以来の先祖代々のカトリック信者には「自分たちは殉教者の子孫である」との自覚・誇りがあること、彼らのサンフアン移住は江戸時代末期以降に繰り返さ

れた「キリシタン移住」の延長として位置づけられること、移住の動機の1つに信仰上の理由があったことを指摘している。

以上の先行研究を踏まえ、本稿は、1955年の最初のカトリック家族の移住によって始まったサンファン教会の歴史を包括的に記述する。特に、一般信者の活動、事跡について詳述する。それは、サンファン教会が一般信者の積極的な活動によって展開、発展してきたからである。

1.2 資料、叙述方法

文献資料として、上に掲げた先行研究のほか、『長崎新聞』、『朝日新聞』（長崎版）、『カトリック移住タイムス』などを用いる。また、筆者による4度（2012年2月15日～27日、2015年8月14日～26日、2016年8月17日～28日、2017年12月28日～2018年1月6日）の現地調査によって得られた証言を利用する²⁾。叙述の方法は、基本的には編年体とするが、必要に応じて前後するところがある。

2. 1955年から1960年まで一黎明期

2.1 最初の教会堂が建てられるまで

サンファン移住地の創設は、1955年7月の「西川移民」16家族88名の入植により始まる。この「西川移民」の中に、長崎県北松浦郡鹿町町（現・佐世保市鹿町町）出身のカトリック信者3家族がいた。各家族の家長は、吉原茂さん（1918年生）、高野美喜夫さん（1929年生）、T・Kさん（1923年生）である。サンファン教会の歴史は、この3家族の移住によって始まった。このうち、高野美喜夫さんは移住地で長く教員を務めるなど、移住地の指導的立場にあった人物で、カトリック教会の発展にも大きく貢献した³⁾。

高野美喜夫さんの次女小百合さん（1954年5月生）は、移住地到着後の幼少時の記憶として、「高野家は朝晩の祈りを欠かさなかった。夜はカンテラの灯の中で、祖父が先上げをし、家族が続いた。朝の祈りは30分、夜の祈りはその後ろにロザリオをするので60分かかった。」と語る。入植当初の困難なときも毎日欠かさず祈った、という証言は、高野家に続いて入植した西沢家（1958年入植、長崎県北松浦郡生月町（現・平戸市生月町）出身）、松崎家（1960年入植、長崎県平戸市出身）の人々からも聞かれた。両家とも、ザビエル時代以来のキリシタンの子孫である。

吉原家、高野家、T家の3家族によって始まったサンファン教会の歴史は、後続のカトリック移住者の到着によって、新たな展開を迎える。計画移住の始まった1957年に、長崎県北松浦郡生月町からS・Sさん（1925年生）を家長とする家族4人、1958年には同じ生月町からN・Sさん（1924年生）を家長とする家族11人、Y・Sさん（1918年生）を家長とする家族9人、F・Kさん（1920年生）を家長とする家族7人が入植する。F・Kさん家族の一員として入植したS・Mさん（1933年生）は、かつて神学校に学んだ経験を持ち、移住地到着後、「教え方」として、移住地の子どもたちが「初聖体」や「堅信」⁴⁾に臨む際の指導役を務めた。こうして、1958年、初代の教会堂（モタク葺き）が建立される。場所は移住地を南北に貫く幹線道路沿い、移住地の入口から5km地点にある吉原茂さんの土地であった（図1）。この場所が選ばれたのは、そこが当時の移住地の中心地点だったからである。

初代教会でのミサは、ラモン神父（イエズス会）らが司式して週に1回行われていた。当時、ラモン神父はサンファン移住地から15kmほど離れたブエナビスタの街で働いており、日本人が移住地に教会堂を建てたのを知って訪ねてくるようになった。毎週日曜日のミサには20～30人の信者の姿があった。

2.2 高野美喜夫さんの手紙—宣教師の派遣と教理書の寄贈を訴える—

「犬も通わぬサンファン」とまで言われた移住地草創期の筆舌に尽くしがたい様々な困難については、サンファン15年史編纂委員会編（1971）や若槻（1966、1973、2001）などに生々しい記述がある。しかし、そのような困難な状況下にあっても、長崎県出身のカトリック信者が信仰心を失うことはなかった。

1960年、サンファン移住地から、創設されたばかりの日本カトリック移住協議会に1通の手紙が届く。差出人は前出「西川移民」の高野美喜夫さん、宣教師の派遣とカトリック教理書の寄贈を依頼する内容だった。この手紙を紹介する記事が、『カトリック移住タイムス』創刊号に掲載されている。抜粋して引用する。

宣教師と書籍を！ ボリビア移住地よりの訴え

南米ボリビアのサンタ・クルズにある日本人入植地の日本語学校の先生である高野美喜夫氏の便りによると、目下最も不足に困っているものは何にかと言うと学校の教科書を初じめ、普通の書籍がなくて非常に苦しんでいるとの事である。また情操教育としてカトリックの教義等を教えるためにもまた、この教材がなく、止むなく自身で教材をつくり教えている。このため本会でも何等かの形で援助する事にはしているが、一般の方からもこんな資料となる書籍の寄贈が望まれる。さらにまた、一層不自由な事は神父の不足な事、とりわけ日本語のわかる神父が殆んどいない事で、時たま、この様な神父が来られる事があると一同のよろこびは非常なもので、早天に慈雨を得たよろこびにひたり、神父が去られる事を深く悲しむのである。日本の故国とは万里の波にへだてられつつも新しい人生に生きるよろこびにひたり、新天地の開拓に精根をかたむけている彼等には何んといっても、一番の慰めは心の糧である。神父と、そしてよい読物をと、彼等の願いは痛切である。（『カトリック移住タイムス』創刊号、1960年8月15日）

この手紙と記事が直接の契機となったかどうかは定かではないが、同年、日本で働いていた一人のスペイン人神父が、サンファン移住地に赴任することになる。流暢な日本語を話し、移住者に「太郎神父」と呼ばれ慕われた、マヌエル・フェルナンデス・エルチエ神父（イエズス会）である。

2.3 「太郎神父」の赴任

マヌエル・フェルナンデス・エルチエ神父、通称「太郎神父」は、1924年にスペインで生まれ、1941年にイエズス会に入会、1957年に東京で司祭に叙階され、3年間、広島、山口の両県の諸教会に配属され、布教に従事した後、1960年に命令を受けてボリビアに赴任した⁽⁵⁾。

「太郎神父」は、移住地到着後、5kmの教会堂でのミサを司式しながら、信者とともに、市街地（12km地点）での教会建設に奔走する。移住地のカトリック教会は、信者の願いを受けて赴任した「太郎神父」を得て大きく発展してゆく。

3. 1960年代—発展期

3.1 長崎からの大規模集団移住者の到着

「太郎神父」のボリビア到着と歩調を合わせるかのように、1960年から1962年にかけて、長崎から多くのカトリック信者（そのほとんどがザビエル時代以来のキリシタンの家系）がサンファンに入植する。当時の入植状況について、サン・ファン移住地入植30周年記念事業推進委員会（1986）は、次

のように記す。

1960年の戦後最高の送出者8386名のうち長崎県出身者が1229名でトップであり、この中にはサン・ファンに入植の8次から9次(38家族)10次、11次(各17家族)の長崎県出身者383名が含まれている。(中略)1961会計年度も長崎県は653名と(中略)多くの移住者を送り出した県であり、この中にはサン・ファンの入植者249名(第12次から第15次)が含まれている。以上の統計は日本の会計年度に準拠しているが、これを歴年の統計に組み直すと8次が1960年、15次が1962年であり、この中間の9次から14次までの107家族622と単身の3名計625名(中略)が1961年に入植したものであり、このうち89家族522名が長崎県出身で(中略)1960年末、663名だった移住地の人口も1961年末には1304名と倍増することとなる(サン・ファン移住地入植30周年記念事業推進委員会 1986, 66)

このとき長崎県出身者が多数を占めたのは、長崎県が県を挙げて移住事業を推進していたためである⁶⁾。以下に、この期間に長崎県からサンファンに入植した人々のうち、2017年現在、移住地のカトリック教会の中心となって活躍している信者家族を、入植年、家族名と人数、家長名(家長の生年)、出身地の順に掲げる。

- －1960年入植：松崎家13人、松崎糸作さん(1911年生)、平戸市
- －1961年入植：畑中家8人、畑中铁巳さん(1921年生)、福江市(現・五島市)
永谷家6人、永谷久雄さん(1928年生)、平戸市
- －1962年入植：障子家9人、障子博忠さん(1922年生)、北松浦郡生月町
吉永家9人、吉永末男さん(1918年生)、北松浦郡生月町
吉永家7人、吉永幸夫さん(1922年生)、北松浦郡生月町

1961年入植の畑中铁巳さん家族、畑中家の親戚であり、畑中家と同船でサンファンに入植した赤島要蔵さん(1918年生)家族らの入植は、移住地でのカトリックへの集団改宗を引き起こす。そのことについては、3.6で触れることとし、3.2では赤島家と畑中家の入植の経緯について記す。

3.2 赤島要蔵さん、畑中铁巳さん家族の入植

1961年2月、赤島家、畑中家を乗せたさんとす丸は、南米に向けて神戸港を出港した。この船には、多くの長崎県出身のカトリック信者が乗船していた。彼らのボリビア移住は、複数のメディアに取り上げられ、注目された。以下は、赤島家や畑中家など五島出身者の移住準備を伝える記事、五島を発つ際に取材したと思われる記事、神戸港でのさんとす丸の見送りについての記事である。

大挙百五十四人 来春 五島からボリビアへ

南米ボリビア国サンファン植民地に来春二月五島から二十二世帯、百五十四人が大挙移住することになり、すでに手続きも完了、出発の日を待っている。

今度の移住者の中には三十三年ごろから南米に移住を希望し、財産も処分してしまってから移住が中止され、今回の移住を待ちわびていた福江市籠淵町のN・Sさん(四四)＝七人家族＝や、また同市久賀町のI・Mさん(四三)は十三歳をかしらに七人の子福者で夫婦を含めて九人家族海外移住にあこがれていたが支度金約十五万円が都合がつかず今時移住を断念していた矢先、今

回同町から移住する赤島要蔵さん(四一)＝久賀カトリック青年団長＝ら七世帯が一戸平均二万余円を出しあい、一緒に移住することが決まったという心暖たまる美談まで生まれるなど話題を呼んでいる。(『長崎新聞』、1960年12月5日)

集団移住の第一陣 五島 九家族ボリビアへ

南米のボリビアに集団移住する第一陣、五島からの九家族六十人は二十二日午後一時「楓丸」で出発した。この中には、若いころ一応南米移住を思っていたが、親の反対にあったという福江市久賀島の畑中新之助さん(八二)もまじり、息子の鉄巳さん(三九)＝家族七人＝に連れられ「海外雄飛の夢がかなった」とうれしそう。

また同市久賀島支所に勤めていた赤島要蔵さん(四二)＝家族八人＝は、海外移住のPR係をしているうち、先頭に立って「家族ぐるみ移住」となった。赤島さんは一昨年、苦勞して家を増築、カトリックの青年会長など指導的な立場にもあった。今春中学を卒業する長男献国君(一六)の「トラクターを運転したい」という夢をかなえてやりたい親心も移住の動機。(『朝日新聞』(長崎版)、1961年1月23日)

二十家族の信者出発 活潑化する神戸埠頭の見送り

二月二日出帆のサントス丸では長崎県久賀島より二十家族のカトリック信者がボリビアに移住するため船出したがその日は特に盛大に見送った。(『カトリック移住タイムス』第3号、1961年3月30日)

多様な出来事が取り上げられているが、これらの記事に書かれていないことがある。赤島要蔵さん、畑中铁巳さんは、福音宣教の精神を持って移住を決意、実行した、という事実である⁽⁷⁾。以下は鉄巳さんの次女、美保子さん(1952年生)の証言である。

赤島要蔵さんと畑中铁巳さんは、かつてともに神父になることを志し、埼玉にあったフランシスコ会の神学校に学んだ。しかし、戦争で兄が亡くなるなどしたために、家督を相続する必要が生じ、聖職者の道を諦めた。やがて二人は五島列島に属する久賀島の区長を務めることになった。あるとき、長崎市で区長会議があり、二人で出かけた。神学校時代のフランシスコ会の神父に会うために、空いた時間を利用して大浦天主堂を訪問した。その場で、二人はサンフアン移住地のビデオを目にする。土地が広く、久賀島のような山道もなく、木が生い茂り、果物も野菜もたくさん採れ、米もできる――そのような移住地の紹介の後、宗教指導者を送ってほしい、神父、シスターに来てほしい、聖職者でなくても『公教要理』を教えられる人に来てほしい、というメッセージが伝えられた。これが、サンフアン移住の決め手だった。鉄巳さんの教会活動の援助・支援のために、高齢の父・新之助さんも同行することになった。

1955年の移住地創設とともに歩みを始めたサンフアンカトリック教会は、太郎神父の到着(2.3)、長崎出身のカトリック家族の集団移住を経て、ついに、市街地(12km地点)に煉瓦造りの立派な教会堂を建立することになる。

3.3 市街地に教会堂を建立

日本海外協会連合会ボリビア支部長として移住地の発展に尽くした若槻泰雄氏は、移住地中心部の市街地整備計画を練り、その場所を12km地点と定めた。こうして、日本海外協会連合会の事務所、学校、診療所、発電施設、農協の精米所などが12kmの市街地に集積されることになった。そして、市街

地の中に、カトリックの教会堂が建てられることも決まった。土地は、日本海外協会連合会から無償で寄付された(図1)。

こうして、市街地に、煉瓦造りの立派な教会堂が建立された(写真1)。この教会堂は、「太郎神父」と信者の協力によって建てられたものである。永瀬利雄さん(1933年長崎県平戸市生、1961年入植)によれば、「米を収穫して、穂摘みし、精米して教会建設の資金とした。信者40家族くらいで、各戸、個々人でそれぞれ何キロと決めた。米で建てた教会」である。教会堂の建立は1961年とする記録や証言もあれば、1962年とするものもある。恐らく、礼拝堂の建立は1961年で、司祭館、信徒会館などが順に建てられていき、1962年に全体の完成をみたものと思われる。

12km地点に煉瓦葺きの教会堂が建てられた後、5km地点の教会に通っていた信者たちは、徒歩や自転車、あるいはS家とY家が所有していたカミオネーター(トラック)の荷台に乗り合わせて12kmの教会に通い、ミサに与るようになった。こうして、役目を終えた5kmの教会堂は取り壊されることになった。いっぽうで、新たな教会堂が、移住地の奥地にあたる28km地点に建てられた。大和区(長崎区)の教会である。

3.4 大和区(長崎区)の教会と家ミサ

28km地点、幹線道路沿いの川上貞市さん(1920年生、長崎県南松浦郡奈留町(現・五島市奈留町)出身、1961年入植)の土地に教会堂が建てられたのは1962年から1963年頃のことである。モタクの屋根、壁のない吹きさらしの造りで、使用されたのは2年ほどの期間であった。

当時、移住地は、入り口にあたる0km地点から北に向かって、順に、西川区、中央区、富士区、共励区、共励区の西に栄町区、共励区と栄町区の北にビクトル区、大和区(旧称・長崎区)と区分けされていた。教会堂が建てられた28km地点は、当時の大和区の中心地26km地点から2km北に位置していた(図1)。28km地点の土地を所有していた川上貞市さんはカトリック信者ではなかったが(日本ではカクレキリシタンであった)、人が集まるのが好きで、快く土地を提供したという。

1960年から1962年にかけて、移住地は、かつてない規模の移住者を迎え入れ(3.1)、そこには多くの長崎出身のカトリック信者が含まれており(3.2)、彼らは移住地最奥部の大和区に入植した。28kmの教会は、大和区に入植したカトリック信者のために建てられたものである。既に12kmの地点に教会は建てられていたが(3.3)、当時、「12kmの市街地と大和区は別の村」と意識されるほど、悪路によって隔てられていた。特に雨期は、全く通行が不可能な状態になることもしばしばであった。このため、大和区の信者のための教会が求められたのである。

28kmの教会堂は、「教会」と言っても普段はがらんどろで、日曜日ごとに12kmの教会から「太郎神父」たちが聖母マリア像、イエス像を持参し、仮祭壇を設置してミサを執り行っていた。「太郎神父」は古いジープを持っており、「太郎神父」自ら、あるいは年少のカサノバ神父(イエズス会)が運転して28kmの教会を訪ねていた。悪路の為に神父の到着が遅れそうな場合は、信者が自主的に朝の祈りやロザリオの祈りを捧げていた。

すぐに、大和区の中心地が28kmよりも更に2km奥の30km地点に移動したため、28kmの教会堂は数年で役目を終え、その後は中心地近辺の信者宅でミサを行うようになった。いわゆる「家庭ミサ」である。「1960年代に『家庭ミサ』が行われていた家」として記憶されている家は次のとおりである。

- A・Tさん(1906年生、1961年入植、長崎市出身) 宅
- A・Kさん(1914年生、1961年入植、福岡県八女郡黒木町出身) 宅
- M・Aさん(1936年生、1961年入植、福岡県八女郡黒木町出身) 宅

F・Yさん(1911年生、1963年入植、福岡市出身)宅

「家庭ミサ」が行われたのは「宿老」と呼ばれる信徒会長の自宅であった。長年「宿老」を務めたA・Kさん、M・Aさんは福岡県の出身で、サンファン入植後にカトリックへ改宗した方々である。この頃、大和区ではカトリックへの集団改宗が起きていた。その背景や経緯については、3.6で詳しく記すが、「キリシタンを先祖に持つ長崎出身者」を中心に発展してきたサンファンのカトリック教会に、このとき、新たな息が吹き込まれたのである。

大和区での「家庭ミサ」は、12kmの教会まで通えない信者のために2000年頃まで続けられた。大和区でのミサには、多いときは100人以上、少なくとも50人以上の参列者があつた。当初、ミサは日本語で行われていたが、隣村のポリビア人や日本人の元で働くポリビア人労働者が参加するようになり、スペイン語に変わっていった。他方、5kmの教会に通っていた西川区の信者と同じように、乾期には、大和区の信者もM・Aさんらの運転するトラックの荷台に乗り合わせて12kmの教会に通つた。

3.5 「太郎神父」の活躍

「太郎神父」の移住地への貢献については、3冊の移住史(サンファン15年史編纂委員会編1971、サン・ファン移住地入植30周年記念事業推進委員会1986、サンファン日本人移住地入植50年史編纂委員会2005)に記述されている。また若槻(1966)や国本(1989)及び小川(2013)にも同神父の活動と移住地への貢献が記されている。以下では、上に挙げた移住史と先行研究には書かれていない「太郎神父」の活動について紹介する。

「太郎神父」は、1960年、ポリビアに日本人が居ることを知り、自ら志願してサンファンに赴任した。しかし、「太郎神父」の活動はサンファン移住地のみに限られたものではなかった。移住地から125km離れたサンタクルス市内に日本人移住者の子女のために女子寄宿舎を開設し、その世話も引き受けていた。また、サンタクルスから80km離れたオキナワ第2移住地の司牧も担当していた。果たすべき役割がとても一人で担いきれるものではなくなったため、「太郎神父」は日本のイエズス会本部に、日本語を話す司祭の増派を要請した。これに応じてポリビアに赴任したのが、「太郎神父」の弟、ホセ・ルイス・フェルナンデス・エルチエ神父、通称「次郎神父」である⁸⁾。「太郎神父」は弟の「次郎神父」と二人で活動するつもりだったが、急遽ブラジルに派遣されることになり、その希望は叶わなかった。

他方、サンファン移住地には、長く、日本人修道女が常駐し、信者だけでなく、全移住者のために働いてきた。そして、『サン・ファン移住地30年史』において、

イエズス会や、サレジオ会の神父と共に、移住地の教育と、地域社会の発展に力を尽くしたのが日本から遙々と渡って来て、忍耐強く活動を続けられた修道女たちであった(中略)カトリック神父の存在はもちろんであるが、これらシスターの存在なしでの移住地の教育は考えられなくなっている。(サン・ファン移住地入植30周年記念事業推進委員会1986:215)

と高く評価された日本人修道女の派遣を実現したのも「太郎神父」であった。「太郎神父」は、イエズス会と同じスペイン系で日本に支部を持つメルセス宣教修道女会の日本管区長ホアナ・ラサルテ修道女に掛け合い、同会の日本人修道女をサンファンに派遣するよう説得した。こうして、1968年に河島清子、中山和子両シスターが派遣され⁹⁾、以後、礼拝会、サレジアンシスターズと受け継がれてきた。

3.6 赤島要蔵さん、畑中鉄巳さん家族の福音宣教活動、大和区での集団改宗

3.2において赤島要蔵さん、畑中鉄巳さん家族の入植の経緯について記した。赤島要蔵さんは、入植後、「太郎神父」を助けながら、畑中鉄巳さんらと協力し、大和区の各家を回り、非カトリック信者のカトリックへの改宗のために奔走する。そして、赤島さんは、サンフアン入植からアルゼンチンに転出するまでの3年余の間に55戸245名のカトリックへの改宗に立ち会っている（国本 1989, 225）。この集団改宗が起きたのには、赤島さんたちの努力の他、複数の要因があった。このことについて、国本（1989, 230-231）は、①ボリビアがカトリック国であり、ボリビア社会で生活していく上ではカトリック信者である方が（特に商売上）有利であると考えた人がいたこと、②移住地の学校運営がイエズス会に委嘱されたために、カトリック信者ではない子どもは学校で不利な扱いを受けると考えた親がおり、子に洗礼を受けさせるのと同時に改宗した人がいたこと、③そもそも日本人は宗教に対してあいまいで、カトリックへの改宗に抵抗がなかったこと、の3点を指摘している。本稿の筆者による聞き取りでは、④ボリビアではカトリックの運営する優れた教育機関に入るためにカトリックの洗礼証明書が必要であったこと、⑤集団改宗が起きた1960年代、大和区では創価学会による激しい布教活動が展開されており、農作業中や深夜にも訪問があり、これを避けるためにカトリックに改宗した人がいたこと、が分かった。また、後に当地で活動したサレジオ会の倉橋輝信神父（4.2）は、⑥食べ物も灯りも道もない時代に、献身的に日本人の世話をしたイエズス会宣教師の生き様に感銘を受けて洗礼を受けた人々がいた、と語った。これら複数の要因が絡み合い、各人・各家それぞれの事情があって、結果として、大和区でのカトリックへの集団改宗が起きたものと考えられる。

前段で記したとおり、赤島さんは、1961年のサンフアン入植から3年ほどしてアルゼンチンに転住している。それは、さらなる新天地を求めて、という理由もあったが、決め手となったのは、赤島さんより先にアルゼンチンに移住していたサンフアンからの転住者への霊的指導に対する使命感であった。その頃、赤島さんや畑中さんと同郷（久賀島）で、赤島さんの親戚にあたる宮本勝美神父（フランシスコ会）が、ブラジルに派遣され、福音宣教に従事していた。宮本神父は、赤島さんがアルゼンチンに転住しようとしていることを聞き、アルゼンチンではなくブラジルに転住するよう勧めた。しかし、アルゼンチンに日本人司祭が一人もいないことを知った赤島さんは、使命感に燃えて、アルゼンチンで働くことを決めた。『カトリック移住タイムス』第34号には、赤島さんを迎えることになったアルゼンチンのカトリック信者の喜びの音が掲載されている¹⁰⁰。赤島さんはアルゼンチンでの福音宣教にある程度めどがたった後、習字や日本語を教える教師として暮らし、アルゼンチンでその生涯を閉じた。

赤島さんの盟友・畑中鉄巳さんは、日本からバイクを持ってきていた。移住地到着後すぐに、バイクに乗って赤島さんとともに移住地のカトリック信者と非カトリック信者の所在調査に出かけた。このため、しばらく農作業ができなかった。そのことを家族の者が抗議すると、「教会の仕事をするために移住するのだと日本を出るときに話しただろう。」「教会を建てなければならない。」との返事が返ってきたという。鉄巳さんの移住当初の目標は、礼拝堂を建て、カトリック青年会を組織することだった。鉄巳さんは、やがて青年会で活躍することになるであろう若者たちにスペイン語を教え、その授業を通じてカトリック青年会の結成に向けて努力した。努力はすぐに実を結び、間もなくカトリック青年会は組織され、積極的な活動を行うようになった。

鉄巳さんの教会活動のうち、今日、移住者に最も強く記憶されているのはサンフアン教会聖歌隊の結成とその指導である。12kmの教会でのミサでオルガニストを務めた鉄巳さんの指導は厳しく徹底していて、聖歌隊の若者、子どもはいつも緊張していたという。当時、州都サンタクルスにも聖歌隊はなく、鉄巳さんに鍛え上げられたサンフアン教会の聖歌隊は、サンタクルスの大聖堂で「御復活祭」

や「聖体拝領」などの大きな行事が行われる際、求められて歌いに行くこともあった。

鉄巳さんの次女、美保子さんがサンフアンに入植したのは美保子さんが8歳のときである。美保子さんは、「太郎神父」やカサノバ神父のジープ(3.4)に同乗し、大和区の信者に聖歌を教えに行った。美保子さんが中学生の頃(1965~67年)は、月に1回(第3または第4日曜)、大和区でスペイン語のミサが行われていた。美保子さんが出席するときは美保子さんの主導による聖歌隊が、美保子さんが出席できないときはカサノバ神父がアコーディオン大のオルガンを自ら弾いて聖歌を歌っていた。

同じ頃、美保子さんは「堅信」の準備をしていた。その折、「次郎神父」から「中学校の同級生にカトリックになりたい人がいれば声をかけるように」と言われた。これを受けて美保子さんは、カトリックに興味のある同級生6人ほどを集めて、毎週水曜・木曜の2日、昼休みの時間に、サンフアン教会で『公教要理』と一緒に勉強した。こうして2~3人が洗礼を受けることになった。

4. 1960年代後半以降—安定期

4.1 巡礼の旅

移住地の発展、安定は、信仰生活にも安定をもたらした。1968年には、現在も続けられているコトカ巡礼が始まる。コトカの教会は、サンフアン移住地からサンタクルスまで125km、そこからさらに25kmほどのところにある。コトカのマリアの祝日は12月8日である。マリアはイエス誕生前の身重な姿をしており、子どもに恵まれない人が祈願すると子を授かると信じられている。昔、まだ、周囲が原始林だった頃、マリア像と思われる木像が見つかり、街の教会に保管しておいたが、なぜか元の場所に戻り、それが何度か繰り返されたので、その場所に教会が建てられたという。コトカ巡礼は「次郎神父」の発案で始まり、現在も毎年5月の第2土曜日に実施されている。

これとは別に、毎年10月の第2土曜日にサンフアンカトリック婦人会はボリビア国内の教会巡りを行っている。きっかけは、1991年の5月、大雨でコトカへの道が不通になり、コトカ巡礼を諦め、やむなく行き先を変更したところ、これが好評で、翌年からコトカ巡礼とは別に毎年行くようになった、というものである。例年2~3箇所の教会を巡っている。

1995年、サンフアンカトリック婦人会とサンタクルスカトリック婦人会の30名弱は、斉藤クニ子シスター(礼拝会)の付き添いで世界巡礼に出かけた。サンタクルスから飛行機でリスボンに飛び、最初に向かったのは聖母の出現で知られるファティマ(ポルトガル)であった。その後、バスでルド(フランス)、アッシジ(イタリア)を周り、ヴァチカンではローマ法王によるミサに参列、ローマから飛行機に乗ってイスラエルへ向かい、バスでナザレトに到着。「イエスがそこで祈った」との伝承がある樹齢3000年とも言われるオリーブの樹の下で祈り、最後にエルザレムを訪ねてボリビアに戻った。この巡礼に参加した人の一人から、「巡礼前、足が痛かったが、巡礼中に足の痛みがとれ、バス移動も苦にならなかった、奇跡だと思う。」との証言が聞かれた。こうしたボリビア国内外での巡礼の経験が、信者の信仰心を強めてきたようである。

4.2 倉橋輝信神父のボリビア赴任

婦人会による世界巡礼に先立つこと15年、1980年2月22日、一人の日本人神父がサンタクルス国際空港に降り立った。倉橋輝信神父(サレジオ会)である。その数年前、倉橋神父は、2年間の予定でローマに留学し、霊性神学の修士課程に学んでいた。留学中、サンフアンとサンタクルスの間の街モンテローで働いていたヘスス・スアレス神父(サレジオ会)からサンフアン移住地のことを聞いた倉橋神父は、帰国後、上司に相談し、許可をもらってモンテローのムユリナ校(サレジオ会経営の男子

高校)に音楽と神学の教師として赴任した。

倉橋神父はモンテローロに10年間滞在し、週末ごとに移住地にでかけ、主に、日本語でミサを執り行うために働いた。また、当時、活動が盛んだった青年会の指導にも励み、得意の音楽の才能を生かしてブラスバンドを組織した。移住地への訪問はいつも泊まりがけで、神父は信者家族の家に宿泊していた。倉橋神父のポリビア赴任は、移住地のカトリック共同体の発展と安定に大きく寄与した。

やがて、倉橋神父の活動は全ポリビア人のために行われるようになる。今では「サンタクルスで倉橋神父を知らぬ者はいない」と言われるほどの有名人である。神父の日々の活動の様子については、曾野 ([1996] 1999: 344-366) や小野 (2017: 1-207) で知ることができる。

4.3 サンフアン出身のカトリック聖職者の誕生など

移住地は、日本人カトリック高位聖職者の訪問を度々受けている。1994年に日本人4人目の枢機卿に選出された白柳誠一大司教(東京教区)は、1985年、移住地創設30周年の折に当地を訪問、追悼ミサを司式した。ブラジルでの会議に合わせてサンフアンを訪問したもので、各戸の家長による歓迎会、信徒会による歓迎会が催された。2003年に枢機卿に選出された濱尾文郎司教(横浜教区)は、カトリック信者の移住関係の担当で、2度移住地を訪問している。長くノートルダム清心女子大学の理事長・学長を務めた渡辺和子シスターも、若い頃、移住地を訪問している。これらの日本人カトリック高位聖職者の訪問は、移住地の信者を励まし、慰め、大きな喜びをもたらした。

他方、移住地は多くの聖職者を輩出してきた。西沢学さん(1951年生)はサレジオ会の司祭、川上清子さん(1948年生)、深浦都さん(1950年生)、障子多美子さん(1953年生)、障子ユリ子さん(1965年生)、永瀬あゆみさん(1976年生)は各修道女会のシスターとして活躍中である。この他にも、神学校に学んだ人、修道生活を送った人は多数おり、サンフアンカトリック教会の人々の篤い信仰心が伺われる。

1998年には12kmの教会が日本人信者の献金によって建て替えられた(写真2)。今日、ミサ参加者は、ポリビア人の数が日本人の数を遥かに上回っているが、ポリビア国内では唯一、所属信者による献金だけで成り立っている教会だという。そのほとんどを負担しているのは、日本人信者である。

5. おわりに一本論文の成果と課題

以上、南米ポリビア・サンフアン移住地におけるカトリック教会の創成と発展を、いくつかの一次資料と、移住者の証言によって叙述してきた。本稿全体の内容を要約すると、本稿冒頭の「要旨」のように整理される。本稿に記したほとんどのことは、これまで、移住者による4つの年史やその他の先行研究では記録されてこなかった事柄である。これを整理して記録したことは、本稿の成果と言える。

他方、従来の教会史が布教者・聖職者側の視点で書かれがちであったのに対し、本稿は信者の活動に焦点を当てて書かれている。教会の歴史は信者の歴史でもある。布教者側・聖職者側の視点による歴史と信者の視点による歴史は車の両輪であり、両者をバランスよく記述していくことが求められる。本稿は、これまであまり書かれてこなかった「信者の視点による教会史」の一実践としての意味合いも持っている。

但し、残された課題は多い。第二次世界大戦後の日本人の南米移住においてカトリック教会がどのような役割を果たしたのかについては、紙幅の都合もあり、本稿ではまったく触れられなかった。サンフアンで日本人信者の司牧にあたった聖職者への聞き取りもほとんど手つかずである。また、本稿

はあくまでもボリビアの一移住地を対象とする事例研究である。第二次世界大戦後、同じ時期に創設されたアルゼンチンやパラグアイ、ブラジルの移住地におけるカトリック教会の発展史を記述し、互いに参照できれば、「戦後の南米移住地におけるカトリック教会の創成と発展—その特殊性と普遍性—」とでも題すべきより大きなテーマへと繋がっていくはずである。これらはすべて、今後の課題である。

註

- (1) 同書は学術調査の結果をまとめたものである。若槻氏には、同書の他にも、自身の体験に基づく第二次世界大戦後の日本人の南米移住にかんする複数の著書（若槻 1966, 1973, 2001）がある。いずれも草創期のサンファン移住地の様子が詳しく記述されており、参考になる。
- (2) すべての証言は、聞き取りの日時・場所とともに記録されている。しかし、次節以降の本文では、煩雑になるのを避けるため、また紙幅の都合上、証言の日時と場所、証言者を逐一記載することはしない。
- (3) 南米に移住した炭鉱離職者を追ったルポ『出ニッポン記』（上野[1977]1995, 493-512）に、高野美喜夫さんの日本時代の生活、移住の動機、日本出発から移住地到着までの様子、移住当初の生活等についてかなり大部の記述がある。しかし、カトリック信仰にかんする言及はない。但し、同ルポ執筆のための調査写真を集成した『写真万葉録・筑豊6 約束の楽土（続）パラグアイ・アルゼンチン・ボリビア篇』（上野・趙監. 1984, 89）に、高野家の屋内写真が掲載されており、イエス、聖母マリア、レオナルド・ダ・ヴィンチ作と思しき『最後の晚餐』の絵が飾られ、かなり大きなロザリオ（念珠）も見え、高野家が熱心なカトリック信者であることが伺われる。
- (4) 「初聖体」はカトリック信者になった人が初めて聖体（パンと葡萄酒）を受ける儀式、「堅信」はカトリック教会における七つの秘跡の一つとされる儀式で、洗礼の恵みの完成に必要なものとされる。いずれも、これに臨むためにはカトリックの教理にかんする勉強が必要になる。
- (5) 「エルチェ神父がボリビア事情を語る」、『カトリック移住タイムス』第38号、1967年3月25日発行。
- (6) 長崎県が一括して移住地の北部に土地を取得し、そこに長崎県出身者が集団で入植した（「ボリビアに長崎村」、『長崎新聞』、1960年8月8日）。現在「大和区」と名付けられているサンファン移住地最奥（北端）の地区名が、当時「長崎区」であったのは、以上の理由による。
- (7) 畑中家は、代々、五島列島に属する久賀島のキリシタン集落において指導的な役割を果たしてきた（小川 2013）。
- (8) 「サンファン移住地へ フェルナンデス・エルセ神父（弟） 新たに派遣される」、『カトリック移住タイムス』第35号、1966年8月25日発行。
- (9) 「サンファン（ボリビア）移住地で子弟の教育に奉仕 メルセス修道女会の計画」、『カトリック移住タイムス』第43号、1968年1月5日発行。
- (10) 「日本人神父が欲しい 赤島氏の驚異的活動を報ずるアルゼンチンの森田氏」、『カトリック移住タイムス』第34号、1966年6月1日発行。

引用文献

「ボリビアに長崎村」、『長崎新聞』、1960年8月8日。

「エルチェ神父がボリビア事情を語る」、『カトリック移住タイムス』第38号、1967年3月25日。

- Ide, Stephen Thompson. 1968. Religious Conversion and Religious Zeal in an Overseas Enclave : The Case of the Japanese in Bolivia. *Anthropological Quarterly* 41(4): 201-208.
- 国本伊代. 1989. 『ボリビアの「日本人村」—サンタクルス州サンファン移住地の研究—』, 中央大学出版部.
- 「日本人神父が欲しい 赤島氏の驚異的活動を報ずるアルゼンチンの森田氏」, 『カトリック移住タイムス』第34号, 1966年6月1日.
- 「二十家族の信者出発 活潑化する神戸埠頭の見送り」, 『カトリック移住タイムス』第3号, 1961年3月30日.
- 小川俊輔. 2013. 「南米に移住した長崎のキリシタン家族—ボリビア多民族国サンファン日本人移住地の事例—」, 『キリスト教史学』67:134-156.
- 小野豊和. 2017. 『みこころのままに—ボリビア宣教師とその仲間たち、愛の実践の危機—』, 幻冬舎.
- 「サンファン (ボリビア) 移住地で子弟の教育に奉仕—メルセス修道女会の計画」, 『カトリック移住タイムス』第43号, 1968年1月5日発行.
- 「サンファン移住地へ フェルナンデス・エルセ神父 (弟) 新たに派遣される」, 『カトリック移住タイムス』第35号, 1966年8月25日.
- サン・ファン移住地入植30周年記念事業推進委員会. 1986. 『サン・ファン移住地30年史』, サン・ファン日ボ協会
- サンファン15年史編纂委員会編. 1971. 『サンファン15年史』, サンファン15年史編纂委員会
- サンファン日本ボリビア協会. 2011. 『サンファン日本人移住地』(リーフレット), サンファン日本ボリビア協会.
- サンファン日本人移住地入植50年史編纂委員会. 2005. 『サンファン日本人移住地入植50年史—拓け行く友好の懸け橋—汗と涙, 喜びと希望の記録』, サンファン日本ボリビア協会.
- 「宣教師と書籍を! ボリビア移住地よりの訴え」, 『カトリック移住タイムス』創刊号, 1960年8月15日.
- 「集団移住の第一陣—五島—九家族ボリビアへ」, 『朝日新聞』(長崎版), 1961年1月23日.
- 曾野綾子. [1996]1999. 『神さま、それをお望みですか』, 文藝春秋.
- 「大挙百五十四人—来春—五島からボリビアへ」, 『長崎新聞』, 1960年12月5日.
- 上野英信. [1977]1995. 『出ニッポン記』, 社会思想社.
- 上野英信・趙根在監. 1984. 『写真万葉録・筑豊6—約束の楽土(続)—パラグアイ・アルゼンチン・ボリビア篇』, 葦書房.
- 若槻泰雄. 1966. 『移民—原始林に挑む日本人—』, 弘文堂.
- . 1973. 『原始林の中の日本人—南米移住地のその後—』, 中央公論社.
- . 1987. 『発展途上国への移民の研究—ボリビアにおける日本移民—』, 玉川大学出版部.
- . 2001. 『外務省が消した日本人—南米移民の半世紀—』, 毎日新聞社.



写真1 : 1961年に建てられたサンファンカトリック教会（『カトリック移住タイムス』第35号（2）面昭和41年8月25日発行より）



写真2 : 1998年に建て替えられたサンファンカトリック教会（2016年8月21日主日ミサ後 筆者撮影）

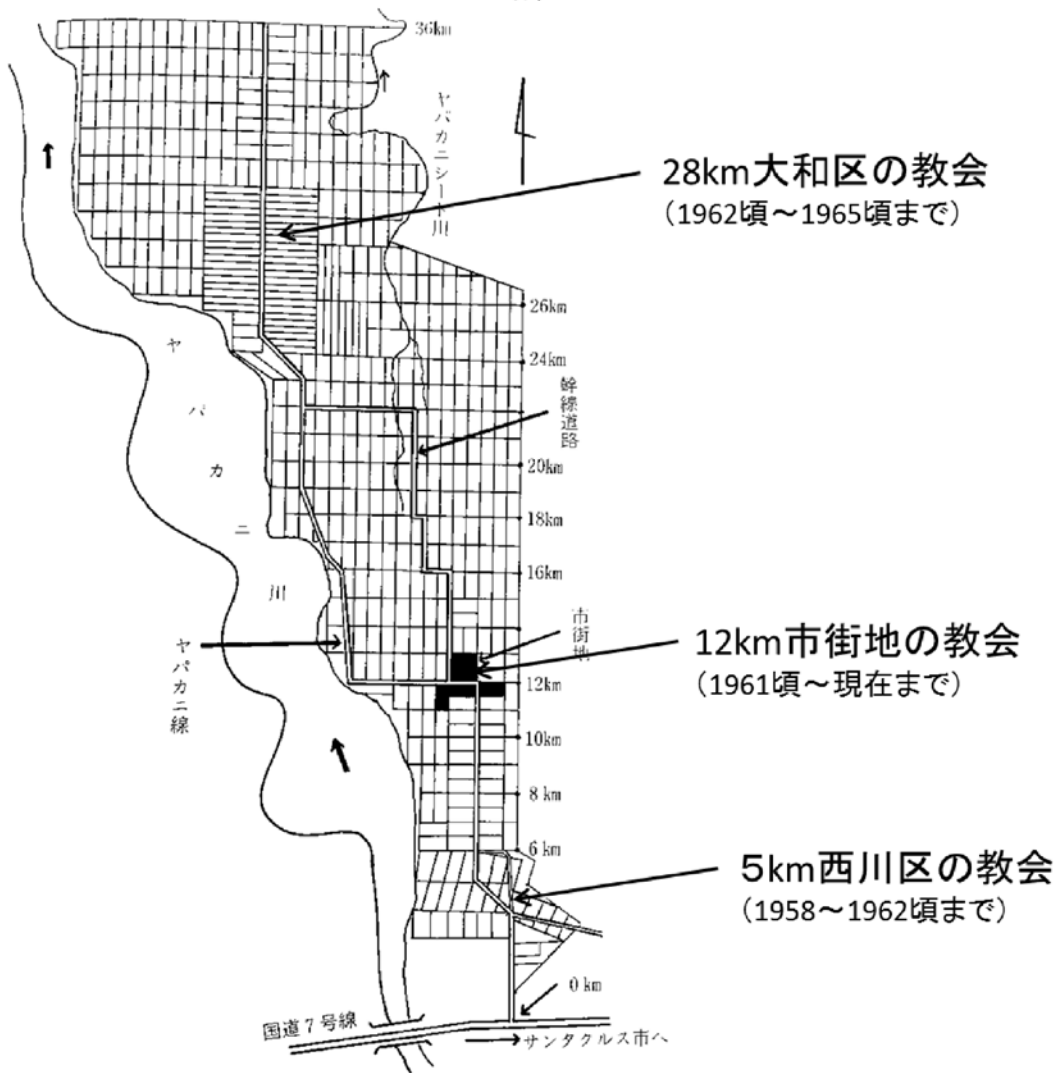


図1 サンファン日本人移住地の道路と耕地配分図およびカトリック教会建立地（国本（1989，19）の地図に加筆）

Abstract

On the Creation and Development of a Catholic Community in a Japanese Settlement Named San Juan in Bolivia

Shunsuke OGAWA

In 1955, a solid Catholic community of Japanese settlement was formed in Bolivia. The name of the settlement is “San Juan”. After the beginning of this settlement, Nagasaki immigrants who were descendants of Hidden Christian in the Edo period had been played a central role in the Catholic community. This paper aims to outline the settlement history through Historical and Cultural Anthropological approach. Let us briefly view the outline of the history as follows below.

In 1955, sixteen families, which include three Catholic families, went to San Juan as the first Japanese immigrants. They continued to preserve their Catholic faith, even during the difficult times at the beginning of settlement, and in 1958, they built a small church. After building this church, they asked the Japan Catholic Migration Commission to dispatch to San Juan a priest with Japanese language ability.

By 1960 to 1961, a Spanish priest who spoke Japanese fluently and held Catholic believers in a leading position was sent from Japan to San Juan as by the request of the Nagasaki immigrants. In 1961, the priest and the Catholic believers of San Juan built a brick church at the center of the settlement.

In the 1960s, many Buddhists converted to Catholicism, and the Catholic community of the settlement developed greatly. After 1968, members of the community visited Cotoca - a sacred sites where a wooden statue of Virgin Mary was found in the primeval forest - every year. In 1995, they also visited some other world famous Catholic sacred places such as Fatima, Lourdes, Vatican and Jerusalem. Their faith grew stronger with these pilgrimage experiences.

At the same time, a Japanese priest and many sisters have also made a great contribution for this community. Nowadays, a priest, a brother and five sisters who grown up at this settlement are working all over the world.

Key words: Nagasaki, Migration to South America, Hidden Christian, Catholic, Religious life